３．色の好みとパーソナリティについて

カラーコンサルタントスタジオ
松田博子

十人十色と言われるように、色の好み（色彩嗜好）は千差万別である。色彩嗜好や色彩好悪に関する調査データも、世界中で実に多く報告されている。多数の報告が報告された理由のひとつに、問題意識や、研究目的による違いがあがられるよう。色の好みは、歴史的、社会的、文化的側面や、人口学的側面によって規定されるばかりではなく、個人の心理的側面によっても規定される。心理学的要因としては、欲求、感情、性格、態度などのほかに、生育歴、経験、教養なども含まれる。われわれカラリストの経験でも色の好みは確かにその人のパーソナリティを反映しているという印象がある。その人が似合う服の色についても、肌の色、髪の毛の色、目の色等の生理学的要因から選べるが、似合う色が、その人の色彩嗜好になんらかの関係を示していることもある。本稿では、今までに報告された色の好みに関する研究を概観し、最後にわれわれの研究内容にも触れ、色の好みとパーソナリティの関係について述べてみたい。

1. 色彩嗜好調査

色彩嗜好の研究には、大きく分けて、万人に通共する普遍的色彩嗜好に関するものと、地理的、文化的等の環境要因・個体的要因等から生じる差を強調する方向性が見いだされるように思われる。前者の方向性としてアイゼンク（Eysenck, H.E.）は、世界各地で行なわれた調査結果を再分析（被験者総数約2万人）し、色の好まれる順を、青、赤、緑、橙、黄色と報告している。そして、色彩嗜好は、人種・性別を越えた共通性があると述べている。またアダムス等 (Adams et al.,) は、世界236文化圈での調査から青、白、緑、赤、黒という順位を報告している。つまり青が万人に最も好まれやすく、緑と白、赤と続く。後者の方向性として表1のように大きく3つの要因が考えられる。このうち、われわれカラリストが最も注目しているのは個体的要因の中でも特にパーソナリティと色の好みの関係である。

2. パーソナリティ

わたしたちは、同じ状況下においても同じ行動をとることは限らず、人それぞれの行動の仕方には各人各様の個人差がある。こうした様々な行動の仕方における個人差は、状況の変化にもかかわらず、その人らしい行動傾向や反応傾向

<table>
<thead>
<tr>
<th>表1 色彩嗜好に関与する要因</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1. 個体的要因</td>
</tr>
<tr>
<td>人口学的側面（年齢、性、人種の違い等）</td>
</tr>
<tr>
<td>生理学的側面（肌の色、髪の毛の色、眼の色等、生理学的要因から選べる）</td>
</tr>
<tr>
<td>心理学的側面（パーソナリティ、心理的特性、気質、気性等）</td>
</tr>
<tr>
<td>生育歴や生活歴に関する側面（色彩との関わりや経験および関連性）</td>
</tr>
<tr>
<td>2. 環境的要因</td>
</tr>
<tr>
<td>社会的・文化的側面（国家、宗教、習慣、流行等）</td>
</tr>
<tr>
<td>原来学的側面（歴史的な側面等）</td>
</tr>
<tr>
<td>地理的側面（気候・風土）</td>
</tr>
<tr>
<td>3. 調査に関与した要因</td>
</tr>
<tr>
<td>動機に関する側面（生理的刺激、心理的刺激、斜陽の光など、筋肉との関わり）</td>
</tr>
<tr>
<td>物理的刺激（光、音、色、光など）</td>
</tr>
<tr>
<td>明暗に関する側面（自然光、人工光）</td>
</tr>
<tr>
<td>職場、屋外に関する側面（職場、屋外、場所の環境）</td>
</tr>
<tr>
<td>調査機器に関する側面（測定機器、計測機器、測定機器）</td>
</tr>
<tr>
<td>評価方法に関する側面（比較法、計測法、視覚法、比較法）</td>
</tr>
<tr>
<td>その他（特定の特徴等）</td>
</tr>
</tbody>
</table>

がみられるように比較的一貫し、安定したものである。このような個人の独自性と統一性を強調しながら、気質、性格、自我、知能などの個人の諸特性を総称してパーソナリティという。一般にはパーソナリティは、その情意的側面である性格（character）と、知的側面である知能（intelligence）を含む概念であるが、狭義には、性格を意味することが多く、本稿においても狭義の用い方をする。性格の記述には、大きく分けて類型論と特性論の2つの立場がある。類型論には、四気質説やクレッチマー（E. Krthsmer）の類型論のように、人間を少数の型に分類し、個人差としての行動傾向を質的の違いとして直接的、全体的に把握しようとする。しかし、個人の多様性を画一化してしまう危険があり、どの型にも分類できない中間型や、混合型の問題点が残る。特性論は、キャッテル（R. B. Cattell）の特性論のように、人格の行動傾向をさまざまな行動の特徴（比較的多数の特性）における程度の差として、量的、客観的に把握しようとするものである。特性論は人間理解を断片的、モザイク的になり、個人の主体性や主体性を見失ってしまう問題がある。このように両者の立場は相反する面を持つが、人間理解のために相補い統合されが望ましい。アイゼンクは特性水準の上位概念として類型水準を想定し、究極的には、両者は統一されようと述べている。

3. 色彩嗜好とパーソナリティについて
1）ゲーテの色彩嗜好論
ドイツのゲーテは、1810年に「色彩論」（J. W. V. Goethe. 1810）を著した。その中の生理的色彩論については、色彩心理学の始まりとわれられており、この中で色彩嗜好について述べている章がある。下にその章を紹介する。
835章 自然人や子どもは高いエネルギーの色、特に橙色、あるいはエネルギーの高い色が、不調和に掻ごに組み合わせられたのでを好む。…
838章 活発な国民、たとえばフランス人はプラス側の高進した色を愛し、イギリス人やドイツ人のように穏和な国民は麦藁色ないし黄色褐色を好み、これに合わせて紫色の服を着る。イタリア人やスペイン人のように品位志向の国民は、マントの赤色もころもちマイナス側にする。
839章 衣服の色は人間の性格、顔色、年齢、身分とも関係がある。
840章 若い女性はパラ色と淡緑を好み、老人は濃い緑を重んじる。ブロンドの女性は黒と淡い黄に、ブルネットの女性は青と橙に愛着がある。…
841章 教養ある人は色彩を嫌う傾向がある。これは一両には趣味を決めかねることによるもののでいまだ女性は白一色であり、男性は黒一色である。

以上がゲーテの色彩嗜好と固体的・環境的要因の関係についての見解である。当時は、心理調査や統計学的研究所されていないので、彼の観察による色彩嗜好論と言えよう。色彩嗜好と、835章は年齢との関係、838章は国民性との関係、839章は心理・生理学側面との関係、840章は年齢・性别・髪の色との関係、841章は教養との関係についての彼の見解である。大まかな捉え方ではあるが、固体的・環境的要因が、色彩嗜好に関係があることを述べている点は、興味深い。
2）アイゼンクによる色彩嗜好とパーソナリティとの関係
①色と四気質
あらかじめある基準に従って分類・整理のための範疇を用意しておく、人のもつ全体的な性格特徴によって人をいくつかの類型（type）に分類する類型論の歴史は古く、紀元前5世紀頃、ギリシアのエンベドケアスの四要素説にはじまる。宇宙は火、水、空気、土から成っているという説にヒントを得て、ヒポクラテス（Hippocrates, 460〜377 B.C.）は、人間の体も四種類の体液からなると考え、ガレヌス（Galenus, 130〜200）は、その多寡によって人の気質が決定されていると考えた。4つの体液は、血液、黏液、黄胆汁、黑胆汁で、これに対応する4つの気質は、感情の動きの違うの違い、表2のような特徴づけた。
今日では、化学的根拠の点から疑問はあるものの、気質の差を体内の何かの物質の差で理解

Vol. 38 No. 2 (1997)
しようとするヒポクラテスの考えは、思想としてはすくれたものであった。それから四気質については、ヨーロッパでは、長く一般的な思想として考えられてきた。ゲーニの色彩論の色環にもこの四気質が配置されている。それによると、多血質は黄緑色、粘液質は青、胆汁質は赤、黒胆汁質は赤黒と記されている。これらは、象徴的な色としてとらえられていたと考えられる。
この四気質の考え方は、アイゼンクの性格理論にも採用されている（図1）。
②アイゼンクの性格理論
ドイツ、フランス、イギリスで教育をうけたアイゼンクの性格理論は、幅広い資料をもとに因子分析的研究を行ない前述したようなパーソナリティの階層的構造を主張した。アイゼンクは、情緒性または、情緒不安定性次元とも言える「神経症的傾向次元」と、これと直交する「外向性－内向性次元」という2次元の図式によって、性格の特性と類型を統一的に記述しようとした。
図1はガレノスの四気質（内）と近代の実証的統計的結果が示された各特性間との関係を表2 四気質と特徴
<table>
<thead>
<tr>
<th>気質（元気）</th>
<th>多血質</th>
<th>吾的</th>
<th>感情の動き</th>
<th>特徴</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>多血質（空）</td>
<td>血液</td>
<td>通い</td>
<td>強さ</td>
<td>赤ずれ</td>
</tr>
<tr>
<td>粘液質（水）</td>
<td>粘液</td>
<td>通い</td>
<td>弱さ</td>
<td>冷静で落ち着いている</td>
</tr>
<tr>
<td>胆汁質（火）</td>
<td>胆汁</td>
<td>通い</td>
<td>強さ</td>
<td>精力的で高めに強い性質</td>
</tr>
<tr>
<td>黒胆汁質（土）</td>
<td>黒胆汁</td>
<td>通い</td>
<td>強さ</td>
<td>酸素を必要とする</td>
</tr>
</tbody>
</table>
(80)
示している（Eysenck, 1964）。
③色彩嗜好とパーソナリティとの関係
アイゼンクの行なった色彩、形態、絵画等さまざまなジャンルの刺激についての好悪に関するデータでは、あらゆる人に共通した側面（T 因子）と人によって差の出る側面（個人差因子 K 因子）が抽出された。前者の万人に共通する普遍性の好悪については、前述したように青色等が好まれるという統計結果がでている。後者では個人差因子と向性との関係に類関（.72）が、見いだされた。色彩好悪についての実験データからは、内向性は暗いにふい色を好み、外向性は明るい強い色を好むという関係が、見いだされている。アイゼンクによれば、そういった好悪と向性との関係は、個人の覚醒水準と刺激の覚醒ポテンシャルとの関係で説明できるという。内向性の人は、興奮によって生ずる神経エネルギーの消費が、身体外の活動ではなく、身体内の活動に向かわれ慎重的な面では、感受性が強く興奮しやすい。すなわち自分の覚醒水準が高いために、覚醒ポテンシャルの低い刺激を受け入れることによって最適な覚醒水準を保つことができる。そこで覚醒ポテンシャルの低い、暗くにごった色を好み、外向性の人はその逆で、覚醒水準が低いため、覚醒ポテンシャルの高い刺激を好むと述べている。
3）YG性格検査とパーソナリティとの関係
最後にわれわれは、性格検査の中で、現在も多く使用されているものの一つであるYG性格検査を用い、色の好みとパーソナリティについての調査をおこなった。それについて述べてみたい。
①YG性格検査について
YG性格検査は、カリフォルニア大学の心理学教授であったギルフォード（Guilford, J. P.）考案の性格検査をモデルとして矢田部、園田、辻岡により我国で作成された性格検査で、質問紙形式により、多次元的な性格特性を総括的にとらえることができる。この検査で、測定される性格特性は12あり、各特性を検出するための質問項目群を尺度という。各特性の強さは尺度得点で測定される。それぞれの尺度は尺度名の英語の頭文字をとって呼ばれる。12尺度は相互に
表３ ＹＧ性格検査の尺度と因子

<table>
<thead>
<tr>
<th>因 子</th>
<th>平 均</th>
<th>D</th>
<th>C</th>
<th>I</th>
<th>N</th>
<th>O</th>
<th>C</th>
<th>O</th>
<th>A</th>
<th>G</th>
<th>R</th>
<th>T</th>
<th>A</th>
<th>S</th>
<th>不 定</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>情緒的安定</td>
<td>情緒的安定</td>
<td>情緒的安定</td>
<td>情緒的安定</td>
<td>情緒的安定</td>
<td>情緒的安定</td>
<td>情緒的安定</td>
<td>情緒的安定</td>
<td>情緒的安定</td>
<td>情緒的安定</td>
<td>情緒的安定</td>
<td>情緒的安定</td>
<td>情緒的安定</td>
<td>情緒的安定</td>
<td>情緒的安定</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>社会的内向</td>
<td>社会的内向</td>
<td>社会的内向</td>
<td>社会的内向</td>
<td>社会的内向</td>
<td>社会的内向</td>
<td>社会的内向</td>
<td>社会的内向</td>
<td>社会的内向</td>
<td>社会的内向</td>
<td>社会的内向</td>
<td>社会的内向</td>
<td>社会的内向</td>
<td>社会的内向</td>
<td>社会的内向</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>非活動的</td>
<td>非活動的</td>
<td>非活動的</td>
<td>非活動的</td>
<td>非活動的</td>
<td>非活動的</td>
<td>非活動的</td>
<td>非活動的</td>
<td>非活動的</td>
<td>非活動的</td>
<td>非活動的</td>
<td>非活動的</td>
<td>非活動的</td>
<td>非活動的</td>
<td>非活動的</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

表４ ＹＧ性格検査の類型

<table>
<thead>
<tr>
<th>順</th>
<th>性格</th>
<th>場面</th>
<th>社会的内向</th>
<th>G</th>
<th>R</th>
<th>T</th>
<th>A</th>
<th>S</th>
<th>不安定</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>A類</td>
<td>平凡</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
</tr>
<tr>
<td>B類</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
</tr>
<tr>
<td>C類</td>
<td>安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
</tr>
<tr>
<td>D類</td>
<td>安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
</tr>
<tr>
<td>E類</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
<td>不安定</td>
</tr>
</tbody>
</table>

関連する因子とよばれる6個のグループにまとめられる。尺度、得点、性格特徴、因子の関係を要約すると表3のようになる。この検査における性格特徴の測定診断は主に尺度レベルと因子レベルでなされるだけでなく、さらにプロフィールの全体傾向からA, B, C, D, Eの5類型に判定される。5類型にはそれぞれ特徴として、差異型、混合型がある。表4に5類型の因子に関する関係および性格特徴を示す。

色彩を含むとYG性格テストによるパーソナリティとの関係

我々は、この5つの性格型と、前進と色彩の複合概念で9つのトーンの好みの関係について調査を行なった（1994, 2）。9つのトーンを高彩度（ピビッド・ブライト・ディープ、トーン、中彩度（ライト・ダル・ダーク）トーン、低彩度（ペール・ライトグレイジッシュ・グレイッシュ）トーンの3つのグループに分けると、安定性について検討すると、安定型（D類）の人は高彩度トーンを好み、低彩度トーンを選ぶ一方、不安定型（E類）の人は、低彩度トーンを好み、高彩度トーンを選ばない傾向があり、また平凡型（A類）の人は、中彩度トーンを好む傾向がみられた（表5）。また、色彩のみが異なる選択肢を用いて行なった調査2)（対象者167名）でも、安定型の人は高彩度を、平凡型の人は中彩度を、不安定型の人は低彩度をそれぞれ好む傾向が認められ、これらの結果は、国が違うアレイが行なった調査とほぼ一致するように思われ興味深い。また、色相による調査2)では、安定型の人はかったる系を、不安定型の人は暖色系を好む傾向が見られた。

4）その他


以上われわれの調査結果も踏まえながらパーソナリティと好みの色の関係については述べてきたが、パーソナリティによって色の好みが何らかの影響を受けていることが推測できる。しかし、色彩嗜好調査で注意しなければならないことは、選択肢数において自分の感情状態に一
致する色を求める（投影）、自分の性格や心情のうちで欠けているものを満たしてくれる色を求める（補償）という全く相反する心理機能にての配慮や、調査方法に関涉した要因によって結果が大きく変わるという問題点がある。たとえば、単に色見本から選択した結果が、その人の基本的な好みをどのくらい反映しているのか、色見本の大きさ、素材、光沢等によるその人のイメージの違い、選択法や質問法など調査方法の違い等の配慮も必要である。また、好んで使う色が同一にもかかわらず、性格が大きく違う場合がある。反対に異質な色でありながら同じ性格の人に選ばれる場合もある。これらを配慮しながらもう少し研究を進めていきたい。

参考文献
1）松田博子，仲谷洋平；「色の好みとパーソナリティとの関係についての研究」，色彩学会関西支部大会講演論文集（1995）
2）松田博子，仲谷洋平；「色の好みとパーソナリティとの関係についての研究 その2」，日本色彩学会誌，vol.20（1996）
3）仲谷洋平；「美術学生のパーソナリティに関する研究」，京都造形芸術大学紀要 創刊号（1994）

繊維製品品質管理士（TES）試験実施要領のお知らせ

【試験日】 7月20日（日）
【試験会場】 東京試験場：日本女子大学、名古屋試験場：栃木女学園大学、関西試験場：武庫川女子大学
金沢試験場：労済会館、長崎試験場：広島文化女子短期大学
【要領発表】 4月1日（火）【出願】 5月10日～5月20日 学歴、年令を問わずどなたでも受験できます。
【問合せ】 上記試験説明会は3会場にて行います。合わせて、TES制度説明会（8会場、「TES品質情報展－衣料品の消費者苦情展－」（現象、苦情品の情報、苦情の発生原因、苦情の再発防止策についての解説）（6会場・参加費無料）も行われますので、参加ご希望の方は下記へお問合せ下さい。
社団法人 日本衣料管理協会
〒105 東京都港区芝公園2-11-13-205，TEL.03-3437-6416 FAX.03-3437-3194

繊消誌